

# 人口の波と人口様式の史的発展

南 亮 三 郎

## I 開 題

歴史はくり返すともいわれ、またくり返すことのないのが歴史の本質であるともいわれる。すくなくとも人口に関するかぎり、そこにはやはりある意味でくり返しがあり、また別の意味ではくり返しが無い。くり返すものは“人口の波”であり、そしてくり返しのなかったものは“人口様式”である。

まず二つの概念から説明しよう。

“人口の波”は出生数から死亡数を引いた人口の自然増加が歴史的な波動をえがいて上下すること、したがってそこには人口の突進と停頓、ないし減退が時間の経過とともに生ずることをさしている。ある時期に人口の突進がおこったかと思うと、つぎの時期にはその停頓、ないし減退があらわれる。それはちょうど経済が景気の上昇と下降との両局面を経過するのに似ている。人口は長きにわたって静止することなく、たえず波状をえがいて運動をつづけてきたように思われる。

この人口の波には長波と短波とがある。短波のうち、いちばん短いものとしては、年々の人口増加の変動が考えられる。ある年度に100万の人口増加があり、つぎの年度に80万の増加しかなかったとすれば、人口はもっとも短期的に変動したのである。この短波はしかし、必ずしも年々の変動だけではない。数年間、ないし十数年間という間隔で起伏する人口の運動もひとしく短期といってよい。これに対して人口の長波は、数十年、あるいは場合によっては百数十年、ないし数百年という長い期間にわたるものをさしている。

つまり人口は、短期的には年々または数年間の短波運動をかさねながら、長期的には数十年、数百年間にもわたる大波動をえがいてきた。

ワゲマン Ernst Wagemann (1884—1956) は“歴史の波”との関連において長短さまざまの“人口の波”を考えようとしたが、<sup>(1)</sup>かれによればヨーロッパの世界は19世紀の終末までの1,000年間に特別につよい人口増加の大波が3度あらわれた。1つは11—13世紀にわたる十字軍の時期、2つは14, 5世紀の黒死病後の増加期、そして3つは18, 9世紀の“嵐のごとき増加”<sup>(2)</sup>の時期であった。この3つの大波はむろんヨーロッパ世界だけについて、しかも年代的には中世末期から19世紀末までについていわれたものである。資料が得られるならば、この大波の観察は他の世界部分にもおしひろげて、なお幾つかのはげしい変動をつけ加えることができたであろう。ヨーロッパ世界についても、たとえば古い時代では古代ギリシアの増加期を指摘しなければならぬし、また20世紀においては第2次大戦前後からの——これはまさに全世界的な規模における“人口爆発”の新時期を忘れることはできない。そうしてみると人口の大波は、過去せる歴史のあるかぎられた時期だけではなく、まさにくり返して、しかもなおわれわれの眼前に展開されている姿なのである。

そのような人口の波動が何にもとづいて生ずるのであるか、人口の波動をくり返えさせる原理的なものが何であるかは、この序説の部分ではふれないでおこう。それはやがて人口の理論問題として、次節以下の叙述が進むとともに次第に明らかにされてゆくであろう。ここでのさしあたっての問題は、もう一つ“人口様式”という新概念を説明しておくことである。

“人口の波”がある国、ある民族の、つねに動いている人口の増減運動をとらえたものであるに対し、“人口様式”はそのような人口の運動をとらし

(1) Wagemann, E., *Menschenzahl und Völkerschicksal. Eine Lehre von den optimalen Dimensionen gesellschaftlicher Gebilde*. Hamburg 1948; do. *Welt von morgen: Wer wird Herr der Erde?* Düsseldorf (o. J.) (Copyright 1952—1953).

(2) Wagemann, *Welt von morgen*, S. 59.

めるその時代の特色的な人口要因の組合せをさしている。周知のように人口は基本的には出生・死亡・結婚の3要因によって左右される。死亡率に対して出生率が高ければむろん人口は増加するが、その出生率の高さはまた結婚によって——正確には結婚率と結婚年齢とによって影響される。しかしその結婚はまたその時代の死亡率と無関係ではない。死亡が多ければむろん結婚の該当者も減ずるのであろうが、その反面に、高い死亡率は高い結婚率をうながすのが常態である。

そうであるならば、3つの人口要因はただばらばらに、偶然的に、ある社会に生ずるのではない。3つの人口要因はそれぞれ特定の数値をもつものとして、しかもそれぞれの社会に特色的な形での組合せとして生起する。ある時代には高い出生率が高い死亡率、低い結婚率と結びつき、ある時代には低い出生率が低い死亡率、高い結婚率と結びつくといった仕方で、独特の組合せが普及する。この組合せをわれわれはマッケンロート Gerhard Mackenroth (1903—1955) の線にしたがって“人口様式” *Bevölkerungsweise* と名づける。<sup>(1)</sup> 人口様式はその時代の人口の、全体としての繁殖構造——何ほどの人口増加をきたすか、それとも人口減退をもたらすか——の態度様式にほかならない。

ところで、まえに述べた“人口の波”が歴史のうえにくり返えされた運動であったに対し、この“人口様式”がある特定の時代、特定の社会にのみ妥当するものとして考えられることに注意したい。どの社会にも3つの人口要因——ここでは人口の地域的移動をとり除いて考えている——が作用するという点では変わりはないが、その要因の組合せがちがってくる。つまり3つの要因の数値が社会によって変わるのである。かのリスト Friedrich List<sup>(2)</sup> (1789—1846) がさかんに人口法則上の“歴史的”契機を主張し、さらに後

(1) Mackenroth, G., *Bevölkerungslehre. Theorie, Soziologie und Statistik der Bevölkerung*. Berlin-Göttingen-Heidelberg 1953, S. 109 ff.

(2) List, F., *Das nationale System der politischen Oekonomie*. Herausg. von H. Waentig, 5. Aufl., Jena 1928, S. 215.

にいたってマルクス Karl Marx (1818—1883) がいかなる特殊の歴史的生産方法も、歴史的に妥当なるそれ自身の特殊な人口法則を有する<sup>(1)</sup>と論じたのも、右のような人口様式の歴史的妥当性を理解する立場から新たな意味を帯びてくるであろう。

人口様式はこのようにそれぞれの時代、それぞれの社会に特有の内容をもつものとして成立する。原始社会や古代社会にはその社会に特有の人口様式があり、中世の前産業社会にはまたその社会の、さらに近代的な産業社会にはその社会の、それぞれ特有の人口様式が存立するであろう。本稿はこのような時代によって異なる人口様式の発展を、幾つかの社会類型の史的区分によってあとづけようとするものである。むろん、この社会類型の史的区分にはいろいろの説がありうるが、私はここで便宜上、つぎの4つの類型に区分したいと考える。(1) 原始および古代社会、(2) 前産業社会、(3) 近代的産業社会、および(4) 高度産業社会、の4つである。この4つの社会類型のそれぞれにどのような人口様式が成立したか、の考察が本稿の目的である。

人口様式の考察が、かの人口の波を説明するゆえんであることも当然であろう。人口要因はそれぞれの時代に特有の組合せをなすことによってその時代の人口様式を形成し、そして人口はそれぞれ特有な人口様式をとりながら史上に反復する波の運動を経過したのである。ただ、このような人口様式の差別性と史的推移とを生じさせた根本が何であるかという問題は、やはりこれを後段の推論にゆだねるのが適當であろう。

## Ⅱ 原始および古代社会

ひと口に原始および古代社会といっても、類人猿的な樹上生活から直立歩行の第一歩をふみだしたアフリカの原人たちの起源からはじめるとすれば、すでに銅や鉄の金属を用いて高度の文明をきずきあげた古代社会にいたるま

---

(1) Marx, K., *Das Kapital*. Herausg. von F. Engels, 10. Aufl., Hamburg 1922, Bd. I, S. 596.

では、何十万年という実にはかるべからざる長い時間が経過している。この間、たちあられた原人たちも、最初の間 *Homo sapiens* からはじまってヨーロッパではハイデルベルク人 *Homo Heidelbergensis* やネアンデルタール人 *Neandertaler* が発見され、東アジアではジャワ人 *Pithecanthropus* やペキン人 *Sinanthropus* という幾つかの種類にのぼっている。これらの原人たちは、その間におこった何回もの地殻の変動や気候の変化によって、あるいは起こり繁殖し移動するかと思えば、自然条件の急変化によってまたちがった種類の原人たちに取って代われ、かぎりなき種の交替と盛衰とが、書かれた歴史のない野蛮・未開の長年月のあいだにくり返えされたのではないかと思われる。

道具としては石器しか用いなかった原始社会は経済的には食物採集の段階であり、まだ植物や動物をみずから育成するという生産経済の段階には進んでいなかった。生活の基礎がこうして自然にのみたよる食物の採集であるかぎり、原始社会の人口がきわめてかぎられた数であり、この数を容易に高めえなかったことは容易に想像しえられるところである。近年カナダに生残する原始人のあいだで観察されたところによると、こういう文化段階での人口密度はせいぜい200平方キロに1人の割合である。<sup>(1)</sup> 草根や木の実のほかに、一部は狩猟によって食物を補充するにしても、せまい地域では獲物はやがて取りあらされる。その取りあらされた原野や森林がふたたび回復して獲物が育つまで原人たちは新たな地域に移動することをせまられ、こうして原始社会の人口密度はごくかぎられた数にしかのぼりえなかった。

動物の育成と植物の栽培がはじまるとともに、人口密度はいちじるしく増大した。生産経済の発展はその土地の生産力を高め、人口扶養力の限度を拡大したのである。この事実は19世紀末の人類地理学者ラッツェル *Friedrich Ratzel* (1844—1904) が説きだしてから具体的に知られるようになった。キ

(1) Kirsten-Buchholz-Köllmann, *Raum und Bevölkerung in der Weltgeschichte*. Bd. I, Würzburg 1956, S. 153.

カリフォルニア大学のピーターセン William Petersen はラッツェルのこの推計についてこういっている。“地球の総面積は極地も、山岳も、サバクもふくめて約5,700万平方マイル、このうち人間の居住しうる面積はその半分である。すると、かりに1平方マイル当り1人の人間が生活できたとする

原始社会の人口密度 (ラッツェル)

	1人当り 所要面積	1平方マイル当 り扶養人口
北極地方の狩猟・漁撈民	75—200平方マイル	
半乾燥地方の狩猟民 (ブッシュメン, パタゴニア人, オーストラリア人)	45—200平方マイル	
部分的に農業・商業をあわせ営 む狩猟民	0.5—2 平方マイル	
羊の放牧民		1.8—4.7人
漁撈民 (北アメリカ, ポリネシア)		4.5人

と、旧石器時代の総人口は最大限3,000万人ということになる。しかし、世界の広さは地質学的にも知られていなかったもので、旧石器時代の人類はせいぜい500万人で、それ以上ではなかった。しかもこの旧石器時代は10万年もつづいたわけであるから、この時期の人口増加率は1世紀につき1.5%の割であったことになる。<sup>(1)</sup>

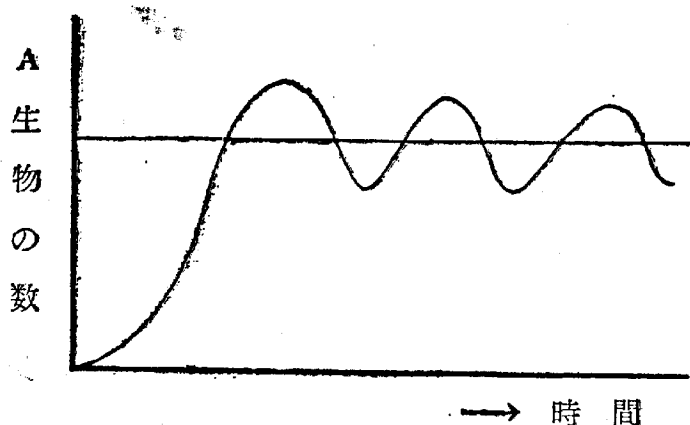
人口増加率が1.5%ということは今日の世界では1年の率より少ないが、原始社会では100年の率であった。つまり原始社会は生産力の低さと生活の不安定のために人口増加をそれ以上に許しえず、今日の世界の人口増加にくらべるならば原始社会はほとんど停頓していたとさえいえるであろう。しかし、ここで同時に注意しなければならないことは、原始社会の人口はつねにほぼ固定して、そこにはほとんど動揺のなかったことを意味するのでないことである。人口はやはりこの社会でも増加をつづけ、あたえられた人口扶養力の限度をとときには超えることがしばしばであった。ただかれらは、身近に

(1) Petersen, W., *Population*, New York, 1961, p. 323.

せまった人口扶養力のせまさのために、いやおうなしにその限界に食いとめられていたのであろう。

原始社会のこの人口波動は、生物界に観察されるごく通常の波型の運動に類している。あらためて説くまでもないけれど、自然界ではどの生物種属も他の生物種属とのあいだに一定の関係をとり、そこにくずれることのない生物界の均衡状態をつくり出している。しかしそれでも、短期的には、ある生物種属は異常に膨脹してこの均衡を破るのであり、終局的には膨脹の限度は

### 生物界の波動



きめられながら無数の波をえがいて動揺するのであ<sup>(1)</sup>る。原始社会の人口はまさにこのような波動のくり返えしのなかにあったと想像せられる。

さて、それならば、このような波動のなかにおかれ

ていたと思われる原始社会の人口要因にはどういふ特徴があったのであろうか。むろんわれわれは、この点では考古学者の研究から断片的な資料を仰ぐほかはない。1つの手がかりは発掘された遺骸(骨格)から推定された原始社会人の死亡年齢である。ピーターセンの記述によると、発掘された原始人の推定死亡年齢は次表のとおりであった。<sup>(2)</sup>ほとんどが若死にしている。平均余命は20歳ぐらいとみるほかはなく、40歳以上で残っていたものはその集落の長老であったにちがいない。

骨格には疾病の痕跡があり、骨腫やコブ状の突起が発見された。しかし致命的なものは格闘で、キズ跡や骨折が多くあとをとどめている。飢えもむろ

(1) Brown, H., *The Challenge of Man's Future: An Inquiry concerning the Condition of Man during the Years that lie ahead.* New York, 1954, p. 10.

(2) Petersen, W., *Population*, p. 326.

原始人187骨格からの推定死亡年齢

年齢階級	ネアンデル タール人		旧石器時代 の上 期		中生代	
	数	%	数	%	数	%
0—11	8	40	25	24.5	20	30.8
12—20	3	15	10	9.8	4	6.2
21—30	5	25	28	27.4	32	49.3
31—40	3	15	27	26.5	6	9.2
41—50	1	5	11	10.8	1	1.5
50+	…	…	1	1.0	2	3.0
計	20	100	102	100.0	65	100.0

んひどかったであろう。そうすると原始社会の人びとは疾病・格闘・飢えの3者にいためつけられたわけで、かれらの生活はきわめて不安定であった。この事情は女子にも変わりはなく、いな女子はいっそう短命でその大部分は20歳以前に死亡したことをしるす

(1) 文献もある。しかし、もしこうして人びとが短命で終わるなら、そして殊に女子が20歳以前に死亡するなら、その社会の子孫繁殖の機能ははたされないで、“親”となる人はひじょうに少ない道理である。したがって、社会の平和と自然の豊かさとにめぐり合わないかぎり、原始社会の出生率は、ひじょうに微弱だったと推論するほかはなく、そのため人口の自然増加はしばしば停頓して人口減退の危険にさえさらされていたのである。

日本でも原始社会の研究は近年さかんに行なわれている。その1つの例を中部山岳地帯の遺跡の発掘にとろう。所は八ヶ岳南斜面の丘陵地で、昭和5年以来20数年間にわたって宮坂英弉氏がほとんど独力で発掘されたという「尖石」および「与助尾根」の両遺跡である。その結果は『尖石』<sup>(2)</sup>として発表されたが、これによると同氏の発掘した竪穴住居あとは尖石遺跡で33カ所、与助尾根遺跡で28カ所の多数にのぼり、いずれも日本の縄文文化（新石器中期）に属している。この多数の住居あとと竪穴は、なかには床の面積径7メートルにもおよぶ巨大なものもあって一見共同の土器焼成の作業場ないし材料貯蔵所たることを思わせるものもあったが、たいていは径4メートルないし5メートルの規模の、しかも丘陵の南斜面を選んだ住居あとであった。

(1) Kirsten u. a., a. a. O., S. 148.

(2) 宮坂英弉『尖石』長野県茅野町教育委員会, 1957年刊。



この発掘調査で特に私の興味をひいたことは、これらの多数の住居あとが必ずしも平行的に、同時代的にあったのではなく、それがしばしば折り重なり、重複し合っているという事実であった。つまりこれらの住居あとは、同じ時代に一度に居住したのではなく、一度居住されて廃棄されていたある時代の住居あとのその上に、あるいはそれに食い入るような形で新たな住居が構えられた、と推定されることであった。つまり、いま発掘された住居あとは、全部同時に住まわれたものではない。ちがった世代が、相重なってその地域に住んだわけである。そうすると、前の世代のものがそこで死滅したか、あるいは他に移動(退去)したかということになる。

宮坂氏は“退去”がしばしば行なわれたと推論する。そしてその事実を考慮に入れながら、この原始社会の“戸数と人口”をつぎのように推算する。——“与助尾根においては、約半数の住居あとの炉あと(引用者注、竪穴のなかには必ず石でかこまれた、あるいは床面を一段掘りさげた炉あとが遺っていた)はこの竪穴形態であって、かかる退去がしばしば行なわれた。したがって、住居あとの総数をもって直ちに集落を構成した家屋の員数とみなすことはできない。この仮定により与の最後の日の戸数を住居あと総数28カ所の半数である15戸とし、この人口は何人ぐらいであったであろう”と設問し、そして関野克博士の推算公式<sup>\*</sup>をあてはめて、“径4.50メートルの円形の面積16平方メートルの1住居の収容人員は4人となり、これにより与集落最後の日の総人口<sup>(1)</sup>は60人前後との計算になる”と結んでいる。

\* この公式は、床面における人間1人の生活面積を縦2メートル、横1.5メートルの矩形3平方メートルとし、そこへ炉に1人分の面積をあたえて1つの竪穴住居に住みうる人間の数を算出する。

1集落に60人といえは、わずかの数である。そして1つの住居あとが平均して4人をしか収容していなかったというのは、われわれがしばしば原始社会にいたく想像をこえた小さな家族単位である。しかし、石器にしかたより

(1) 前掲『尖石』244—245ページ。

えなかった採集経済の当時の段階にあっては、1集落60人の生活をささえることさえ容易なことではなかったであろう。草根と木の実と森の動物——しかも冬期酷寒の八ヶ岳山腹のことを思うと、この生活は尋常では維持できない。しばしば生命の磨滅が、死亡がおこったにちがいない。同時に、しばしば“退去”が、移動が行なわれたにちがいない。どこへ、どうして移動したか。その経過も、原因も、考古学研究の現状では、ただ想像にゆだねられるだけである。私にいわせれば、それは生産力の枯渇——そしてそこへ押しよせる人口圧迫ということ以外にはない。ただこのような人口圧迫の作用や帰結を類推せしめる何の痕跡も遺されていないのは残念なことである。

縄文文化が弥生文化（新石器後期）に入ると、金属用具が用いられて水田耕作がはじまり、原始社会の人口扶養力は顕著に拡大した。いままでの共通の貧困から脱出して富の蓄積と階級の分化傾向があらわれ、それがやがて古墳時代の新たな文化段階へと発展する。新石器時代もここまでくると、すでに野蛮・未開の段階を通りこして、いわゆる書かれた歴史の古代社会につづくわけである。

古代社会にも人口が目立った突進があったことは前節中にふれたが、この事実はいまは多くの史家によって認められている。『経済分析の歴史』においてシュムペーター Joseph Schumpeter (1883—1950) はそのことを指摘している<sup>(1)</sup>、また史家トインビー Arnold Toynbee も名著『歴史研究』のなかで紀元前4世紀ころの古代ギリシアの都市国家を例にとり、その国々が<sup>(2)</sup> 当面した“生存資料への人口圧迫”の経過を説いている。

さきを急ぐ私は古代社会については多くを語らない。古代社会のあるものは次節でとり扱う前産業社会にもつながるし、近世的な経済形態の発展さえ見られるものがあるからである。典型的な人類社会の第1段階はやはり原始

---

(1) Schumpeter, J. A., *History of Economic Analysis*, New York-Oxford 1954.

東畑精一訳『経済分析の歴史』第2分冊、岩波書店、1956年、521—522ページ。

(2) Toynbee, A. J., *A Study of History*. Abridgement by D. C. Somervell, London-New York-Toronto 1960, pp. 4—5.

社会であり、人間と土地との最初の対決がはじまったのもこの社会段階であった。そしてそこでは、つねに高い死亡率が人間の存命期間をちぢめ、子孫繁殖の社会的機能は十分に発揮されえなかった。高い死亡率がむしろ低い出生率と組みあわさされて、局限された採集経済の段階に対応するところの人口様式をとったものと思われる。

### Ⅲ 前産業社会

年代的には西洋の中世紀をへて近世初期にいたるまでの、——もっと具体的には産業革命のはじまる18世紀なかごろまでのヨーロッパ歴史の全時期を、かりに“前産業社会”とよぶ。“前産業的” preindustrial は近代的工業化の進行する以前という意味である。ロストウ W. W. Rostowはこの社会段階を“伝統社会” traditional society と名づけ、その特徴を“限定された生産函数の内部で発達した社会”，いいかえれば“近代的な科学・技術から流出する潜在力がまだ得られないで，1人当り産出高の水準になおある限界が存した社会<sup>(1)</sup>”と規定している。東方では中東および地中海の文明，中国の歴代王朝期，そして日本の江戸時代から明治初年のころまではこの社会段階をもって特徴づけることができよう。

前節の末段にみた新石器時代の農耕と牧畜の発明は原始的食物採集種族に生存資料の貴重な補充をあたえた。そしてそれが一たび発展するや動植物の飼育は，書かれた歴史の夜明けとして近東にさかえた都市文明への技術的基礎となった。生産力の発展は前時代にくらべるなら格段の前進となり，人口もまたこれに応じて原始社会とは比較にならない規模に増大して行った。しかし，この全時期を通じて長期的にみるならば，かの生産力が“限定された生産函数の内部”におさえられていたように，人口成長に関しても，実に数千年の長いあいだ——産業革命がヨーロッパ世界を変革するまで，本格的

---

(1) Rostow, W. W., *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*. Cambridge 1960, pp. 4—5.

な変化をあらわさないで経過した。伝統的な前産業社会はそれに固有の人口様式を形成させながら、限定された社会の生産力との噛み合わせをつづけていたのである。

キルシュテン Kirsten 等の編述した世界人口史によると、十字軍遠征のくり返し行なわれた11—13世紀には——かのワーゲマンのいわゆる人口増加の大波が見られた時期であるが——全体として出生率も死亡率も高かった。出生率は42%、死亡率は36%と推定され、自然増加はわずかに6%にすぎなかつた。<sup>(1)</sup>

まず死亡率がなおひじょうに高かったという点で、中世の伝統社会は原始社会とさほど大きなへだたりはない。その古い証左の一つはベロッホ Julius Beloch がローマ時代の墓石から推定した死亡年齢である。<sup>(2)</sup> 次表によると、

墓碑銘から推定されたローマ時代の年齢別死亡数

年齢階級	男	女	計	1876年の プロイセン
0—15	315	252	289	540
16—30	331	428	370	67
31—45	171	169	170	} 185
46—60	81	71	76	
60+	102	80	95	199
不詳				9

いちばん多い死亡者は16—30歳の年齢階級で、31歳以上は少なくなり、46歳以上になるとさらに一段と少なくなっている。右欄は比較のために1876年のプロイセンの数字をもつ

てきたもので、このころはプロイセンでもよくなかったことがわかる。一見奇異に感じられることは、プロイセンでは15歳未満の死者が540人で全体の過半に達しているのに、ローマ時代では289人で子供の死者が目立って少ないことである。しかしこれはローマ時代に子供の死者が少なかったという証拠ではなく、けっきょく子供の死者についてはローマ時代に墓石を建てるこ

(1) Kirsten-Buchholz-Köllmann, *Raum und Bevölkerung in der Weltgeschichte*. Bd. II, Würzburg 1955, S.17.

(2) Cited in Petersen, W., *Population*, New York 1961, p. 360.

とが少なかったという理由による。ちょうど日本の戦前の統計を見て不思議に思われるように、沖縄の死亡率が他の府県にくらべて目立って低かったこと、そこでは住民のあいだに子供の死亡を一人前として扱わない習俗が存していた事情に似ている。

原始社会にくらべるなら平均余命はこの社会段階で30歳近くに伸びているが、それでも死亡率の高い水準が中世を通じて持続し、18世紀なかばからはじまる産業革命期にいたるまで着実な低下傾向を示したという証左はない。高死亡率は前産業社会の一特徴であった。死因のおもなものは依然として襲う周期的な飢饉、流行病、および社会秩序の崩壊(戦争)であった。

飢饉はヨーロッパに比較的少なかったが、それでも中世には2年あるいはそれ以上つづく大飢饉が数回おこった。カイザー Erich Keyser の記述によれば、これらの大飢饉は1100—1101年、1124—1126年、1145—1147年、1150—1151年、1195—1198年、1225—1226年、それから1315—1317年とおこっており、12,3世紀だけでもベルギーは11回、中部ラインは8回、バイエルンは11回、オーストリアは10回もおそわれている。<sup>(1)</sup>そして最後のヨーロッパの大飢饉は1840年代のアイルランドの飢饉であった。これに対してアジアでは、さらにはなはだ頻繁であった。紀元前108年から1911年までの約2,000年間に中国大陸では1,828回の飢饉がおこり、多くの県ではこの2,000年間にほとんど毎年来襲し、人間1代のうちには必ず数回のはげしい飢饉に見まわれる始末であった。近世での最悪の飢饉の1つは1877—1878年に北部4県をおそったもので、この2カ年間に900万人ないし1,300万人が飢えと、疾病と、<sup>(2)</sup>暴動のために落命した。インドの状況も大差がなかった。

流行病はより大きい障害をヨーロッパ人口にあたえた。規模のもっとも大きかったものは14世紀の“黒死病”であるが、これは突如としてヨーロッパをおそったのではなく、すでに6世紀のなかばに腺ペストの形態で来襲し

(1) Keyser, E., *Bevölkerungsgeschichte Deutschlands*, Leipzig 1938, S. 246.

(2) Petersen, *op. cit.*, pp. 362—363.

た。すなわち紀元 546 年および 558 年にはラインランドに、552 年にはシュ  
ワーベンおよびバイエルンに、561 年にはトリエールにおこっている<sup>(1)</sup>。それ以  
来、局地的なペストは断続的に発生していたが、何ととってもヨーロッパ全  
土に壊滅的な打撃をあたえたものは、最初の発生から 800 年後におそった黒  
死病であった。これは 1347 年、コンスタンチノーブルに発生したのが始まり  
で、その年の秋までにシシリー島につたわり、翌 1348 年の春には地中海をこ  
えてイタリア、フランス、スペインにひろまり、6 月にはパリに、9 月には  
ロンドンを禍中にひき入れた。1349 年にはロンドンから西にむかってはヨー  
クへ、そしてスコットランドへは 1350 年に達した。一方、イタリア、フラン  
スからはドイツの諸都市へひろまって 1350 年には東プロイセン、1352 年の春  
にはロシアにひろまった。しかもこの流行はただ一度ではなく、同じ地方に  
何度も反復流行した。たとえばイングランドでは 1348—1350 年、1360—1361  
年、1369 年、および 1375 年とおこっており、前後 80 年間の長きにわたってい  
る。ヨーロッパの人口は 1348—1350 年の最初の来襲で 20—25% を失い、この  
世紀の終わりまでには総人口の 40% を失ったといわれている<sup>(2)</sup>。

飢饉と流行病が相伴なって進行するという事実は、この両者のあいだの直  
接的關係よりも、むしろこの両者の根本にある食物の供給と公衆衛生とが実  
は社会秩序に依存しており、またその秩序に影響をおよぼしうる、というこ  
とを暗示している。何百、何千という同一社会の隣人たちが飢えと流行病と  
で落命するのを目撃した人びとは、既存の社会規範にしたがって日常の業務  
を遂行しつつけようとはしない。かれらは故郷を逃避し、そしてこの逃避が  
流行病の伝播を手伝うのである。

しかし、何ととっても、社会秩序の崩壊は戦争の暴力行使によっておこる  
場合が大きい。ヨーロッパは中世から近世にかけて何度も長期の戦争におち  
入った。百年戦争、30 年戦争、かれらの戦争は人間 1 代の長さをこえるもの

(1) Keyser, *Bevölkerungsgeschichte usw.*, S. 242.

(2) Petersen, *op. cit.*, pp. 364—365.

が珍しくなかった。最大の規模はむろん十字軍の遠征であった。十字軍の参加者は1096—1099年の第1次遠征33万人からはじまって1270—1291年の第8次遠征2万5,000人にいたるまで計110万人に達しており、そのうち目的をはたした聖地到着者は前後8回を通算して50万5,000人<sup>(1)</sup>となっている。つまり遠征者の半分以上は戦死するか病死するか逃亡するかして目的を達しなかった。相次ぐ長期の戦争が中世および近世のヨーロッパ人口に、頻繁に大きい空洞をつくっていた事情は明らかである。

死亡率がヨーロッパ社会のこの段階にいたってもなお高水準であったことはもはや疑いがない。しかしそれでもなおこの時代のヨーロッパ人口が長大な波状の起伏運動をおこしていたとすれば、高い死亡率に見合う高い出生率が相伴い、そして時期によっては人口の大きい空洞をうずめてなお余りあるほどの高い出生率が存在したと推定するほかはない。さてそれならば、前産業社会の人口様式はどういう形で成立していたのであろうか。回答をかいつまんでさきに述べれば、高い死亡率と高い出生率——この2要因を独立変数とし、そして結婚率と結婚年齢とを状況に応じて操作する従属変数としていた。これがこの社会段階の特有な人口様式であった。

その理由を説くためには、われわれは何よりもこの社会段階の経済形態を想起しなければならない。むろん経済形態は中世から近世にかけての時期にいろいろに変化し、また国や地域によって必ずしも形態を一にしなかったであろう。しかし、ごく大ざっぱに言えば、経済の根本構造は農業にあり、そして一方では都市文化を発達させて商業・工業・金融・交通業の中心地たる地位を確立して行った。一面からみればそれは農業経済の段階であり、他面からみればそれは都市経済の段階でもあった。そしてこの都市経済が经营主体のかわにおける職種に応じてきびしいギルド制度のもとにあったことは経済史の常識である。

問題の鍵はここにある。土地にしばられた農業は自由にその持地 *Hufe* を

---

(1) Kirsten u. a., *Raum und Bevölkerung*, Bd. II, S. 18.

ひろげることはできず、息子の一人が親の持地を手に入れば他の息子たちはそれに身をよせて生きるよりほかはない。つまり農業における“職場”は土地にしばられて限定されている。他方、都市のギルド制は親方の存在は認められたけれど、それにかかえられた多数の徒弟・職人の独立は自由に認めなかった。これらの若者たちが期せずして早期に親方になりうる途があったとすれば、それは親方が死亡してそのあとを受けつぐという偶然であった。つまり都市においてもその“職場”はギルドという社会的規制によってきびしく限定されていたのである。

このような経済のなかで人口の増減が行なわれるとすれば、道はただ一つしかないであろう。結婚率と結婚年齢の高低の操作がそれである。経済の発展によって新たな“職場”が開拓されるか、あるいは戦争や流行病によって人口の空洞が生ずるならば、それをたちまち埋める人口の運動は結婚率の上昇と結婚年齢の低下とを媒介として実現され、反対にその社会が過剰人口の危機につきあたったとすれば、それから脱出する人口の運動として結婚率の低下（独身者の増加）と結婚年齢の上昇（晩婚）とがおこる。出産力の任意的抑制をまだ普及させなかった前産業社会は結婚という要因に操作の手を加える以外に道はない。しかしこうして進行する人口運動こそマッケンロートが“驚歎すべき適応”<sup>(1)</sup>と名づけ、また人口要因の“古き噛み合わせ”<sup>(2)</sup>として語ったものにほかならない。<sup>\*</sup>

\* この“古き噛み合わせ”は前産業社会の崩壊とともに解体した。現在のヨーロッパでなおこの人口様式をのこしているものはアイルランドであって、マッケンロートはこの地域を新人口様式のまだ入りこまない「カプセル空間」<sup>(3)</sup>と名づけている。なおアイルランドの興味ある人口史的研究としては近年、CONNELL K. H. Connell の一書<sup>(4)</sup>が出たことを付記しておく。

(1) Mackenroth, G., *Bevölkerungslehre: Theorie, Soziologie und Statistik der Bevölkerung*. Berlin-Göttingen-Heidelberg 1953, S. 120.

(2) Mackenroth, a. a. O., S. 439.

(3) Mackenroth, a. a. O., S. 167 ff.

(4) Connell, K. H., *The Population of Ireland 1750—1845*. Oxford 1950.



## IV 近代的産業社会

前産業社会の人口事情はまだ散在的、断片的な資料によってさぐるよりほかはなく、学者も政治家もその当時、本当は人口の動きを知ってはいなかった。かのモンテスキュー Montesquieu (1689—1755) が『ペルシア人の手紙』<sup>(1)</sup>を書いて、地球の人口が毎日減少していること、そして“もしこの状態がつづけば、10世紀以内に地球は無人境となるであろう”と嘆いたのは18世紀の初頭のことであったし、またヒューム対ウォレスの、同じく地球人口の増減に関する有名な人口論争が展開されたのは18世紀なかばのことであった。<sup>(2)</sup>つまりこれらの論者たちは18世紀の中ごろにおいてもまだ、世界の人口が実際にどう推移しているかを知る確実な資料をもたなかったのである。

18世紀のそのなかばから、ヨーロッパの経済が大きな転換期の入口にさしかかるとともに、人口の事情もまた次第に資料的に明らかになってきた。近代的センサスはこの時期に北欧諸国からはじまり、次いでアメリカ(1790年)イギリス(1801年)へとひろまり、センサスなき国々の推定も加わって18世紀なかば以降の世界の大勢は明らかになってきた。それ以来200年間の世界

世界人口の推移 (単位 100万人)

	1750	1800	1850	1900	1950
ヨーロッパ……	140	187	266	401	559
アジア……	479	602	749	937	1,302
アフリカ……	95	90	95	120	198
北アメリカ……	1	6	26	81	166
中・南アメリカ……	11	19	33	63	162
オーストラリア・オセアニア……	2	2	2	6	13
計	728	906	1,171	1,608	2,400

(1) Montesquieu, *Lettres persanes*, Paris 1721.(2) Hume, D., *Of the Populousness of Ancient Nations*, Edinburgh 1752; Wallace, R., *A Dissertation on the Numbers of Mankind in Antient and Modern Times*, Edinburgh 1753 (anonymous).

人口の推移は上表のとおりである。<sup>(1)</sup>

この表について、1750年の各大陸人口を1とすると、ヨーロッパは4.0、アジアは2.7、アフリカは2.1、北アメリカは166.0、中南米は14.7、オーストラリア・オセアニアは6.5となる。アジアとアフリカが膨脹力がいちばん低く、北アメリカがもっとも高い。しかしこの北米や中南米、さらにオーストラリア・オセアニアなどの新大陸の膨脹が主としてヨーロッパ人の移住や繁殖によっていた事情を思いあわせると、ヨーロッパ人口の4.0倍という増加はさらに実質的に付加されなければならない。1750年にはヨーロッパ系の人間が1億4,500万と推定され、1950年には8億と推定されるから、かれらはこの200年間に実に5.5倍の膨脹をとげたのである。それはアジア人口のまさに2倍の大膨脹であった。

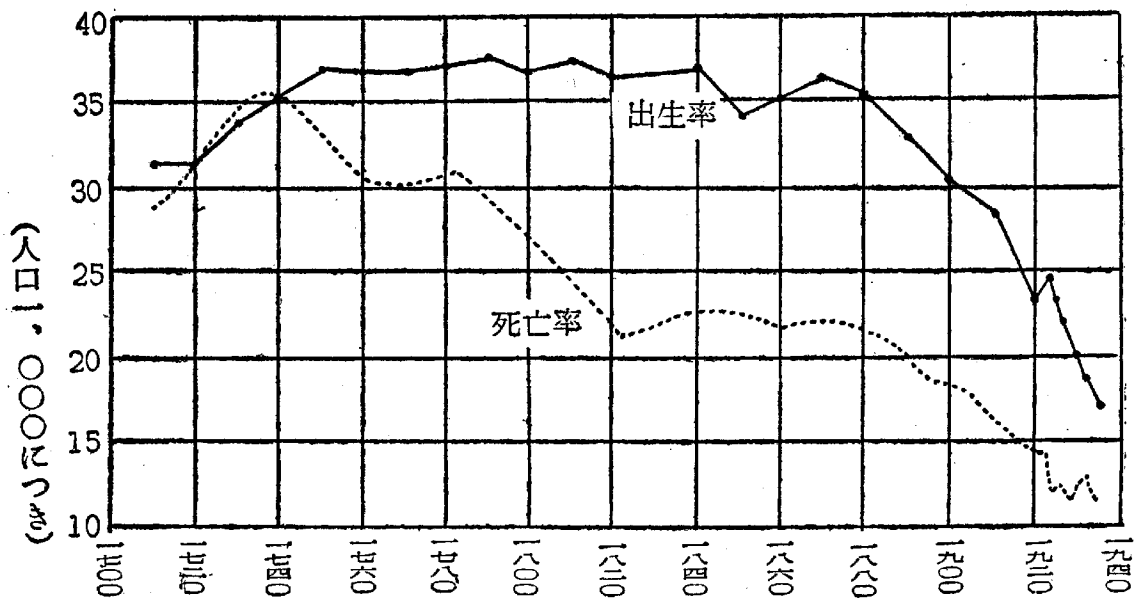
さて問題は、産業経済の変革を背景にしてヨーロッパ人口はどうしてこういう大膨脹をとげたのであるか。いいかえれば、近代的産業社会の発展とともにヨーロッパ人口の繁殖構造——人口様式はどう変化したのであるか、ということに帰着する。しかしむろん、この時代の背景としてのヨーロッパ経済の発展については、われわれはここで詳しく語る必要は少しもないであろう。イギリスに端を発した産業革命が18世紀後半から19世紀にわたって、当時の史家にも説明のつかない歴史の奇蹟として、——“人類の年代記にその比を見ない一歴史”<sup>(2)</sup>としてみられるほどの変革を経済的にも社会的にもそして文化的にもひきおこして行った過程を、ここで思いおこしていただくだけでよい。その過程は一言にして“工業化”であり、そしてそれが現代の世界にもなお急速力に、しかもいたるところで大規模に進行している現象なのである。

---

(1) Kirsten-Buchholz-Köllmann, *Raum und Bevölkerung in der Weltgeschichte*. Bd. II, Würzburg 1955, S. 140.

(2) Engels, F., *Die Lage der arbeitenden Klasse in England* (zuerst 1845), 7. Aufl., Stuttgart 1921, S. 15.

いま、世界の諸国にさきがけて18世紀なかばから19世紀にかけてこの工業化過程をなしとげ、人口動態の面では空前の大膨脹を実現したイギリスを例にとると、——この空前の人口膨脹が根本的にはイギリスの人口扶養力、すなわち経済的生活空間の拡大によることはいうまでもないが——その出生率と死亡率とは下図のようなカーブをえがいて経過した<sup>(1)</sup>。工業化過程の進行中  
 イングランド・ウェールズの出生率と死亡率



に出生率は上昇し、その高まった水準を約半世紀間持続している半面、死亡率は18世紀なかばから徐々にではあるが着実に低下して行った。これはまさに先開きのシェーレ運動である。次いで観察を1870年代以降にうつすと、死亡率は依然低下をつづけて今世紀にいたっているが、他面出生率はこの時期から低落傾向に転じ、その低落の勢いは死亡率の低下よりはげしく、1930年代には両者は相交わるほどの近さに接してきている。つまりシェーレはこの後半の時期に形を変えて先端を閉じるものとなった。しかしこの時期にもなお人口の増加はあった。人口の増加は所詮、出生率から死亡率をさし引いた差としてあらわれるから、工業化過程の前半の先開きのシェーレ運動の場合と同じように、後半の先閉じのシェーレ運動の時期にもそのハサミの面積だ

(1) Carr-Saunders, A. M., *World Population: Past Growth and Present Trends*, Oxford 1936, p. 61.

け人口増加が実現したのである。

こうして見ると、典型的な工業化過程には人口動態上の3つの特徴があらわれたことが明らかである。(1) 死亡率が全期間にわたって着実に低下したこと、(2) 出生率が期間のはじめにまず上昇し、その高まった水準を相当の期間持続したこと、(3) 期間の後半にいたってその高い出生率が急激な低下傾向に転じた、という3つの事実である。図表に示されたイングランド・ウェールズはむろんイギリスの一部であり、そのイギリスはまたヨーロッパのほんの一国にすぎないから、イングランド・ウェールズの事実経過は必ずしも近代産業社会の全部を代表しえたものでないという疑問がおこるかもしれない。しかし、興味のあることは、このイングランド・ウェールズの経過が——経済構造を若干異にしたフランス一国を特別の例外として——北西ヨーロッパの先進諸国にほとんどまったく類同の形であらわれたという事実である。マッケンロートがこれを一括して北西ヨーロッパ集団と名づけ、そしてこの国々に典型的にあらわれた如上の人口運動のあり方を“ヨーロッパ的人口様式”<sup>(1)</sup>とよんでいるのは、けっして理由なきことではない。

そこで上記3つの特徴を、まず死亡率から簡単に見て行こう。高い死亡率は前産業社会の特徴であったが、この死亡率が18世紀のなかば以降に低下をはじめ、その低下傾向が19世紀を通じて動かなかった事情は、何といたってもこの期間に進行した医薬衛生の着実な改善から説明されなければならない。なかんずく大きな進歩は1798年に発表されたジェンナー Edward Jenner (1749—1823) の予防接種であった。むろん産業革命期の暗黒面は今日までしばしば問題とされ、ことに新興工業都市の非衛生・不健康な生活実態は社会史家の克明にえがきだした姿であったが、全期間を通じた長期的観察では前産業社会の高死亡率が次第に克服されて、早期におこる死亡の危険が明らかに人類の統制下におかれてきたという事実は疑うことができない。経済的

(1) Mackenroth, G., *Bevölkerungslehre*, 1953, S. 122 ff.

な工業化過程は人口の面では死亡率の克服過程となって進行したのである。

つぎに出生率の動きが問題であるが、この出生率が最初を高まっているという点にまず注意をもとめたい。工業化過程は速刻に出生率の低下をとまうように錯覚されがちであるが、事實は約半世紀間にわたって高率を持続したのである。ヨーロッパ的な自由経済の方向においての長期的な工業化過程はこんご世界の残余諸国にそのまま再現されるとは思えないが、たとえこんごに予想される急速度の国家的な工業化過程であっても、それがただちに出生率の低下をとまうものとはならない、という点は低開発国の現在および将来を考える場合に大切であろう。マルサス Thomas Robert Malthus (1766—1834) が近代人口理論のさきがけとして暗い影を人類の前途に見ようとしたのは、まさにこのような工業化過程の前段階の時期であった。

その高い出生率も、19世紀の70年代には急激な低下傾向に転ずる。それはいったい、どういう事情の変化にもとづくのであろうか。自発的・予防的な出生制限がこの時期から急速にヨーロッパ社会に普及したことはむろんその直接的原因である。しかし出生制限のこの普及にはさらにそれを動機づける本来の原因がなければならない。ピーターセンはこの事情を、前産業的な“伝統的家族” traditional family から近代的な“合理的家族” rational family への家族パターンの変化として説明している<sup>(1)</sup>。また一方マルクス主義の立場からは、同じく家族パターンの変化に着目しながら、そのような変化が一部の上流階級や中流階級だけでなく何ゆえにプロレタリア階級たる大衆のあいだに普及したかを労働需要の変化から説明し、この労働需要の変化を資本主義社会の質的变化——独占資本主義の発展として論じようとする人も出て<sup>(2)</sup>いる。

そのほか、近代社会の出産力減退についてはむろん文献は豊富多彩であっ

(1) Petersen, W., *Population*, 1961, pp. 399-400.

(2) Coontz, S. H., *Population Theories and the Economic Interpretation*, London 1957, esp. pp. 145 ff.

て、ここでいちいちとりあげるいとまも必要もない。われわれの注意したいことは、近代的産業社会の進行とともに経済のパターンだけではなく社会的・文化的な全パターンが変化し、社会の繁殖構造そのものが変わってきたという点である。前産業社会では出生率と死亡率とがほとんど固定し、人口の運動はわずかに従属変数としての結婚率の上下によって適応を実現してきた。しかるにいまや近代的産業社会が成熟するにつれて、これらの人口要因間のからみ合いは解体された。出生率はもはや結婚率によって操作されるを要せず、出生率だけが切りはなされて人間の任意的統制下におかれることになった。人口を調節するためにはあえて結婚をおくらせる必要はなく、結婚は急いでも出産力はそのあとで自由に調節されうるといふあらゆる物理的手段が安価に普及した。これこそ近代的な工業文明がもたらした“成果”であろう。

これをいささか理論的に表現するならば、前産業社会における結婚は“完全職場”のうえに立脚していた。耕地を相続するか、都市工業の親方のあとを受けつぐか、いずれにせよ結婚は完全な経済価値の裏付けのうえに、そして子孫繁殖のまったき機能を予想したうえで取りはこばれた。しかるに近代的産業社会では結婚をはばむ社会的拘束は次第にとりのぞかれ、繁殖の点からは結婚はどこからも拘束をうけない完全価値となった。ただこれにともなつて完全価値となりえなかったものは大衆の職場にほかならない。大衆の職場は経済的に価値切下げとなり、前産業社会の職場にくらべるならばたしかに“不完全職場”に転化した。結婚が自由に行なわれながらその結婚の出産力が唯一の従属変数として操作される社会——それが近代産業社会であり、そしてこの社会を特徴づける独特の繁殖構造がこの社会の人口様式にほかならない。<sup>(1)</sup>

---

(7) Vgl., Mackenroth, *a. a. O.*, S. 439 ff.

## V 高度産業社会

前節に述べた近代的産業社会は年代的に18世紀なかばから今世紀の第1次世界大戦の直後期にいたるほぼ1世紀半の期間にわたるもので、それを発展の前期と後期との2つの段階に分けた観察であった。1世紀半、ないし200年にもわたるこの全期間にヨーロッパ人口は新旧両大陸をあわせて5.5倍という空前の膨脹をとげて人口史上にかつてない大きな波をうたせたのであるが、その波の経過と局面とを分解してみると、そこには2つのちがったシェーレ運動が——すなわち上昇局面と下降局面との2つがあらわれ、そして今世紀の第1次大戦後にこの下降局面が落ちつくべきところに落ちついたこと、いいかえれば18世紀以来の人口の大波はここで一応の終止符をうって人口のサイクルを閉じたことが明らかになった。

そこで最後の問題は、この大きな人口の波はヨーロッパ人口にとって最後のものであるか、いいかえればヨーロッパ人口はもはやいかなる人口の波もくりかえさないのであるかという問題、そしてもう1つは世界の残余諸国はこれから、いったいどういう波に入りこもうとするのであるかという問題である。すでに余白がないので簡単に所見を述べておこう。

ヨーロッパおよび同系の人口国には第2次世界大戦の前夜ごろから、すなわち1930年代の終わりから1つの変化がおこりつつあった。出生率の軒並みの反騰がそれであって、人口学者はこれを欧米出産力の upsurge (盛上がり) 現象として論議の対象とした。この出産力の盛上がり現象はごく近年にいたるまで比較的長くつづいたばかりでなく、ことにアメリカやカナダにおいては近年にいたっても依然として高率を維持し、この盛上がりはすでに20年もの長期間にわたっている。ここからして欧米の人口は、たとえ19世紀的な大波はくり返さないにしても、何か新たな波の転期にさしかかったのではないかという観測が生まれてきた。むろん今までに引照した人口学者のだれもがこのような新たな波のくり返しを説いているわけではない。「明日

の世界」を構想したワーゲマンも、欧米人口のこの新たな傾向には格別の注意を払わず、むしろ百年以上にわたった異常の人口増加期を終えた白人世界はいよいよ“緩漫なテンポの段階”に入りこみ、そして“それは民族の運命が——より静かな港ではないにしても——よりゆるやかな水路に入りこみはじめたことを意味するだろう<sup>(1)</sup>”と観察した。またマッケンロートもこの点の観察にはひじょうに慎重であって、わずかに、“もし今日の出生率の回復を戦後的な1現象として、すなわち1930年代はじめの深い谷に対する1つの波のうねり返えしだと説明しなければならぬとしても、長期的にはおそらく再生産水準のほとりに安定したわけである<sup>(2)</sup>”と軽くふれるにとどまっていた。

私もむろん積極的な観察を述べる段階ではまだないと思っている。しかし、ここで1つ指摘したいことは、近代的産業社会が第2次大戦前後から別の段階に入りこみはじめたのでないかという考え方である。ロストウはこの新たな段階を“高度大衆消費の時代”と名づけた。1人当りの実質所得の増大、人口の都市集中化の急速な進展、この2つの条件変化に応じて耐久消費財の生産拡大と国民の経済福祉の急上昇とが達せられた。この変化はすでにアメリカに完全におこっただけでなく、1950年代には西欧と日本がこの段階に入りこみ、いまはソ連もまた急速にそれに入りこむ容易ならぬ努力をつけている、というのがロストウの経済成長の段階理論であるが、この理論にもとづいてかれが産児思想もまた新たな経済の成長段階で変化するのに言及しているのは興味ふかい。——“耐久消費財革命がつぎのような1点、すなわちその普及率が低下しだしたという1点にまで移動してゆくにつれて、アメリカ社会はもっとも格別な、かつ予想もされなかったある決断を行なった。アメリカ人は、あたかもかれらが消費の余分の単位を選ぶ代わりに、余

(1) Wagemann, E., *Welt von morgen*, Düsseldorf (1952—53) S. 78.

(2) Mackenroth, G., *Bevölkerungslehre*, 1953, S. 224.

(3) Rostow, W.W., *The Stages of Economic Growth*, 1960, p. 10 f.



分の赤ん坊を選んだかのように行動しはじめた<sup>(1)</sup>”とロストウは述べている。私はこのような社会段階を“高度産業社会”と名づけたわけであるが、この社会段階での人口資料はまだ十分でなく、ほんの試論的にしかこの段階の人口様式を説く以上に出ることができない。しかしこの段階は人口動態の面からも重大であり、資料が整備されるならばここでまた新たな人口様式の形成がはじまり、そしてそれによって在来の人口理論の幾つかを改変するきっかけとさえなるであろうと考<sup>\*</sup>えている。

\* 今日手にしうるもっとも新しいこの面での人口分析としては、アメリカ各大学連合の全国経済調査委員会によって刊行された『発展国における人口および経済変動<sup>(2)</sup>』(1960年)にまさるものはない。私は最近、これらの新資料にもとづいて、かなり大胆な1論文を書いた。香川大学大泉行雄教授の賀寿論文集のために寄せた論稿「経済成長の段階と人口理論」がそれである。あわせ見られるならば幸いである。

さてもう1つ、世界の残余諸国の問題がある。われわれの見てきたように、過去の社会が典型的に原始・古代社会—前産業社会—近代的産業社会—高度産業社会と発展し、そしてそれぞれの社会類型に特有の人口様式が形成されてきたとすれば、世界の立ちおくれた残余地域が同様の軌道を経過するであろうことも当然予想される場所である。アフリカやオセアニアにはまだ“原始・古代社会”の段階にとどまっている諸民族もあり、アジアや中南米には“前産業社会”を思わせる国々も多い。これらの国々はやがて工業化の過程をおし進め、いわゆる“局面経過の加速の法則<sup>(3)</sup>”にもとづいて、欧米諸国が50年あるいは100年を費やして成就した人口運動上の変革を、はるかに短い期間に完了するかもしれない。そうだとすると、かりにこれらの国々が“近代産業社会”の後半の段階に入りこんだとき、かれらのあいだにもまた理論的にはヨーロッパ的な人口増加の下降局面がおとずれるものと予想せ

(1) Rostow, *op. cit.*, p. 80.

(2) *Demographic and Economic Change in Developed Countries: A Conference of the Universities—National Bureau Committee for Economic Research, Princeton 1960.*

(3) Mackenroth, G., *Bevölkerungslehre*, S. 335.

られる。

しかし、世界の低開発国の現状は、この理論的な推論を容易にゆるさない事情を示している。経済と社会が近代化する以前に、したがって1人当り実質所得の着実な上昇が前提となることなしに、医薬衛生施設の画期的な導入をうけて死亡率のみは急速に低下をみせはじめた。一方、出生率は依然として高いのであるから、低開発国の人口増加は前代未聞の高率となっている。年2%あるいは3%の自然増加率は現在の低開発地域のいたるところに見られる<sup>\*</sup>。これとりもなおさず低開発地域を中心にした現在の世界の“人口爆発” population explosion といわれるものの核心である。

\* 私は近年、アジア経済研究所の委託をうけて、多数の少壮人口学研究者と共同でアジア低開発国の人口研究をつづけている。その成果の1は『アジアの人口構造』（アジア経済研究シリーズ第1集、1960年、アジア経済研究所刊）、その2は『アジアの人口増加と経済発展』（同シリーズ第20集、1962年、アジア経済研究所刊）として発表された。さらに近く『セイロンの人口構造』その他も完成される予定であるが、これらの一連のアジア人口研究を通じてわれわれの現に得ている結論の一つは、日本をのぞいて、出生率低下の本来のきざしはまだアジア諸国のどこにもあらわれていないということである。

歴史の偶然といおうか、アジア、アフリカ、中南米の人口は世界全体が増加の勢いにある時点で膨脹期をむかえた。国連の推計<sup>(4)</sup>によると、人口増加は次表のとおりアジア大陸だけではない。アフリカ、北米、中南米、オセアニア

世界人口の推計と将来予測 (単位 100万人)

年	世界	アフリカ	北米	中南米	アジア	ヨーロッパ (ソ連を含む)	オセアニア
1900	1550	120	81	63	857	423	6
1925	1907	147	126	99	1020	505	10
1950	2497	199	168	163	1380	574	13
1975	3828	303	240	303	2210	751	21
2000	6267	517	312	592	3870	947	29

(1) United Nations, *The Future Growth of World Population*, New York 1958, p. 23.

アも増加し、ヨーロッパでさえが大きく増加してゆく。そして紀元2000年には世界人口の総計は62億7,000万という龍大な数にのぼることになる。最近に世界25カ国を遍歴して人口事情をしらべたというヴォークト William Vogt は“地球の表面における人間の氾濫<sup>(1)</sup>”と表現して世界人口の、とてつもない大増加につよい警告を発している。このような人口増加は何を経済・社会・文化・政治の面にひきおこすだろうか、また世界諸国はこの人口増加にどう対処してゆくであろうかは、もはや本稿の考察外にぞくしている。私はここでもう一度波の構想者ワーゲマンを思いおこし、かれもし在世してこの世界の現状を目撃しつづけたであろうならば、世界はいまこそ巨大な——しかり前世紀の波とは比較にならない大きな、新たな“人口の波”に入りこんだといったではなからうかと、ひそかな想像を付記して稿を終わることにしよう。

---

(1) Voigt, W., *People! Challenge to Survival*. New York 1960, p. 17.